パラケルススにおける「自然の光」の概念

大橋博司

「自然の光」(Licht der Natur) とはパラケルスス(一四九三―一五四一)の医学的・哲学的・宗教的諸著作に頻出する主要概念の一つであるが、彼によって必ずしもその明確な定義が与えられているわけではない。「光」という表現はコスモスの認識、経験に関する最古のシンボルとも言われており、聖書をはじめとして、中世の錬金術、ネオプラトニズム、カバラなどの神秘思想とも深く関わるものであろう。また「自然の光」を、アウグスティヌス、聖トマス、アルベルトゥス・マグヌスらのスコラ哲学における "lumen naturae" (自然の光) と結びつけようとする見解もある。

パラケルスス自身は「自然の光」なる概念を、はじめ人間に生来存するところの理性の意味に用いていたようで、「理性の光」とも言っている。これは要するに自然の経験から直観的に獲得される人間の認識知であり、同時にあらゆる存在物にも始めから隠されている。宇宙論的な見地からすれば、自然の隠された力の放射でもある。ここで自然の光の対立概念として用いられるのは「永遠の光」(Licht der Ewigkeit) と呼ばれる、神による啓示の知である。

後期にいたって、「自然の光」はむしろ「創造的原理」の意味を賦与され、直観によって導かれ、経験によって修得される意識性となる。これは聖霊そのものではないが、「自然の光は聖霊により点火された」ものとなる。

かくして自然の光は自然認識のみならず、善悪の判断をも可能とするものとされ、倫理的、神学的なアクセントをも所有するようになる。

彼の著作を通じて「自然の光」と「永遠の光」との限界はかなり浮動的であり、後期の作品である "Philosophia sagax" においては「永遠の光」がより強調されている。

しかしいずれにせよ、全き知に至るには、「自然の光」と「永遠の光」との両者が必要であるとパラケルススは考えていたにちがいない。

(京大精神科)